

幸せを考えさせる国

吉川左紀子(こころの未来研究センター長)
Sakiko YOSHIKAWA

2010年の後期から始まった、京都大学ブータン友好プログラムに参加している。当初、このプログラムのことを知ったとき、私は「え、ブータン？ どこにある国ですか？」というくらい白紙の状態だったが、秋の曇り空のブータンを1週間ほど旅したあとは、この国のもつ不思議な魅力に惹かれ、強い関心をもつようになった。

ブータンといえば、知る人ぞ知る「国民総幸福（Gross National Happiness）」を政策にかかげる、ヒマラヤ山脈の中腹にある人口70万の小さな王国である。インドと中国に挟まれた発展途上国で、国としての生計をたてるにはインドや日本を含む外国からの援助が必要である。地方の農村では、今でも電気のない生活をしている人たちがいるし、東西に一本走っている幹線道路は、片道1車線の狭いワインディングロード。国の面積は九州よりも少し小さいくらいだが、西の端から東の端まで移動するのに2,000mから3,000m級の峠をいくつも越えねばならず、3日以上かかるという大変不便な国でもある。こんな「客観的」描写から思い浮かぶのは、幸せとはずいぶん距離のある国なのではないだろう

か。

ところが実際に行ってみると、不思議なことに、ここは幸福を国の政策にかかげるのにふさわしい国だなあ、と納得できるのである。一体どうしてだろうか……。

考えても理由がよく分からないときには、自由連想という方法を使ってみるのが一番だ。私の最初の滞在は、1週間ほどの短い期間だったが、旅で知ったブータンの人たちの印象を思い出すまま並べてみると、こんな様子になる。

1) 祈る人たちである（寺院にも学校にも病院にも、大きなマニ車が備えてあり、通りかかった人が習慣のようにそれを回してゆく）。2) 謙虚だが誇り高い人たちである（行政府の人たちの言葉のはしばしから、国の将来に対する使命感を感じた）。3) おいしいお茶とお菓子をふるまう人たちである（役所や民家で出されるお茶がいつもおいしかった）。4) 教えること、教わることを大切にしている人たちである（立ち寄った小学校や大学で、生徒や学生が生き生きと楽しそうだった）。

2度目、3度目の旅で出会った人たちのやりとりや観察から、さらに次のようなことにも気が付いた。

5) 現世のことだけでなく、前世や来世のことも考える人たちである。6) 伝統衣装をおしゃれに着こなす人たちである（色遣いや



ブータン仏教のお祭り(ツェチュ)。2011年7月10日、クジェラカンで撮影

着こなしに気を配り、寺院のお祭りでは小さな子どももきちんと正装する)。7) 虫を殺さない人たちである（そのせいだろうか、ハエものんびりしていて手で追ってもすぐには飛ばない。不思議だ……）。

祈り。生きる姿勢。人をもてなす心。育み導くこと。生と死。美の意識。命と自然への敬意。まだ直感に過ぎないが、ブータンの今のあり方をじっくり考えることで、日本人のあるべき姿につながる世界が見えてくるように思える。ブータン政府で働く日本人女性の話では、ブータンの首相は「幸せはひとりひとりが感じる主観的なもの。自分たちは幸せを目指した政治をするだけ」と、とてもシンプルだそう。

「そして、おじいさんとおばあさんは、末長く幸せに暮らしましたとさ」。ブータンを旅していると、なぜか日本の昔話にでてくるこの最後のフレーズが思い浮かぶ。この「幸せ」は、人との暮らしの中の、素朴で穏やかな幸せの感覚だろう。このシンプルさと、それを実現するむずかしさ。

ブータンは、私たちに、幸せを考えさせる国である。



タシチョゾン。国王執務室とブータン仏教総本山がある

エッセイ

「徳が先か、きずなが先か。それが問題だ」

平石 界 (こころの未来研究センター助教)
Kai HIRAISHI

7月頭に南仏モンペリエで開催された「人間行動と進化学会」に参加してきました。夜9時までの研究報告のあと、まだ明るい街に繰り出して夕食をとり、ホテルでシャワーを浴びて寝て、翌朝また会場に戻る充実した5日間でした。

この学会、人間性の進化がテーマなのですが、中でも「徳の進化」が重要な問題となっています。実際、今年の学会の冒頭を飾ったのはサラ・ハーディ博士による協力性の進化にかんする講演でした。ハーディ博士は、霊長類研究者として、特に女性性、母性の問題について研究してきた方です。なぜ母性の研究が、協力性の話と結びつくのでしょうか？

しばしば「人間はなんて身勝手な動物なのだろう」とか「同じ種で殺し合いをするのは人間くらいだ」などと言われることがあります。しかし意外かもしれませんが、人間は、動物界の中でも抜きん出て協力的な存在です。たとえば人間と最も近縁な動物であるチンパンジー。彼

(女)らもなかなか協力的だったりしますが、人間と比べると、その程度は小さいといわざるを得ません(本号の山本論考をご覧ください)。何が人間とチンパンジーの違いをもたらしたのでしょうか。

その回答の1つとして、家族や仲間が一緒になって子育てする「共同繁殖」が注目されています。これも意外かもしれませんが、母親以外が子育てに積極的にかかわる動物は、特に哺乳類ではほとんど見られません。父親も、祖父母も、おじ・おばも、子ども(孫、甥姪)の世話にそれほど積極的ではない。チンパンジーもその例外ではありません。

ところが南米に住むタマリンやマーモセットといった新世界猿は、共同繁殖することが知られています。そこで彼(女)らの行動を調べてみると、チンパンジーよりもずっと協力的であることが分かってきたのです。そこから、共同繁殖する動物(人間やタマリン)では協力性が進化する。すなわち家族の「きずな」から「徳」が進化したのではないかと考えられているのです。ハーディ博士の講演は、母性を研究してきた霊長類学者の視点から、こうした一連の研究を概論したものでした。

自分も父親として子育てにかかわるようになって数年。私はハーディ博士の話にすっかり感銘をうけていました。ところがその日の午後のことです。昼食後の講演は、ティム・クラットン=ブロック博士。動物行動学の大家として知られる博士の講演もまた、人間の協力性の進化にか



奥に見えるのが「人間行動と進化学会」会場の建物

んするものでした。そこで博士はこう言ったのです(意識です)。「朝の講演でサラ(ハーディ博士)は、共同繁殖が協力性を進化させたと言った。でもちょっと待ってほしい。逆の可能性も考えるべきなんじゃないか? 協力性の高い動物だからこそ、人間は共同繁殖ができるんじゃないだろうか」。そして博士は、自説を支持する大量の研究データを披露して見せたのです。

たしかに「共同繁殖する動物は、協力的である」という事実からは、どちらが原因でどちらが結果なのか、鶏が先か卵が先か、簡単には結論づけられません。「ティムの話もっともだよ」「でもサラの話だって説得力あった」。その日の夕方、学会参加者の感想はさまざまでした。そうした様子を見て私は、これこそ科学の醍醐味だなと、軽い感動を覚えました。

どんなに有名でどんなに優れた科学者であっても、間違うときは間違う。だからこそ、自分が結論に至った道筋をすべて明らかにして、皆の意見を聴き、正面から議論する。それが科学という営みだと私は思います。「徳」をめぐる2人の対決は、南仏の青空の下、科学の姿をすがすがしく体現したものでした。



筆者、ポスターセッションの前で